勝海舟にみる人間形成

勝部真長

今年は勝海舟ブームの年などといわれ、NHKの大河ドラマで、これまで勝海舟について何も知らなかった人々も、幕末における勝海舟のはたらきについて注目するようになりました。海舟の父親の勝小吉は、大へん子どもの麟太郎に期待をかけ、その教育に心をつかった人で、今でいえば「教育パパ」の元祖のような人でありました。麟太郎が野犬に喰いつかれて大怪我した時など、毎晩、金毘羅さまに水垢離をとりに通い、七十日間も病体の伜を抱いて寝て、看病しつづけたというくらい子煩悩でした。麟太郎が世話になっている剣術の師匠島田虎之助を訪ねて、いろいろ伜の剣術の素質など聞いただし、やがて島田先生を誘って料理屋でご馳走するなど、父兄としても教育熱心なところをみせ、今ごろの父親などには、こんなに子どもの教育のことで熱心に先生を接待する人など見当たらないようです。麟太郎の母のお信は、勝家の家つき娘でしたが、千蔭流の歌と書の巧みな人だったそうで、佐久間象山がお順をもらう気になったのも、一つはその母のお信が、字がきれいで武家の女房としてのたしなみの立派なところに感心した、という意味のことを象山が友だちへの手紙に書いています。

さて勝海舟の生涯を見渡してみて、彼の人間形成における四つの特徴をわたくしは次に挙げておきたいと思います。

1　逞しく生きる　海舟は自分でもいっている通り、「本当に修業したのは剣術ばかりだ」ということで、少年時代にはもっぱら剣術、青年期に入ってから「禅」を、向島の弘福寺に通って四年

間みっちり修業した、といいますから、主として身体と心を鍛錬することに熱中していたので、机に向かっての勉強はほとんどやらなかったようです。その代り、身体の丈夫なことは「ほんにこの時分には、寒中足袋もはかず、袷一枚で平気だったよ。……ほんに身体は、鉄同様だった。今にこの年になって、身体も達者で、足下も確かに、根気も丈夫なのは、全くこのときの修業の余慶だよ」と晩年になって回想している通り、アタマの学習より、カラダを鍛えたことが、生涯の土台になっています。

この点、今の子どもの育て方は狂っているといってよく、カラダを鍛錬することをやめてしまって、ひたすらアタマをよくすることばかりに注意を向けているようですが、生涯計画としては、本末顚倒だと思います。

2　**自他ともによりよく生きる**　父の小吉が本所入江町の自分の住居を中心に展開していた生活は、四十俵小普請の貧乏生活なのですが、アルバイトに刀剣のブローカーをしたり、夜店に出て露店の古物商をしたりして家計を補うと同時に、そんな中で周辺の困っている人たちの生活相談に乗ってやり、武士でも町人でも、困った時は助け合うという生き方を、身をもって子どもたちに示していました。これは無言の家庭教育で、「自分さえよければ他人のことは知らない」といったエゴな生き方とは全く反対のものです。これが海舟の一生の生き方の支えになっていると思います。

3　**他のために生きる**　右に述べた相互扶助、武士は相見互い見といった態度は、さらに進んで奉仕・献身の生き方となります。とくに職業生活、仕事に向かうとき、海舟はつねにからだを張って献身的に、責任を果しました。その頂点は江戸無血開城のための官軍相手の談判とかけひきでした。江戸百万の市民の生命・財産を守るため、平和的な解決に自己を投げ出していました。

4　**永遠のいのちに生きる**　明治三十二年に七十七歳で死ぬまで晩年の海舟はもっぱら趣味に生きていました。五万点からの書をのこし、数十冊の著述をまとめ、茶をたて、庭に窯を設けて焼きものをしたりして暮しました。

（お茶の水女子大学附属幼稚園長）